

第4章 勘場木石器時代住居跡関連文献集成

第1節 概要

勘場木石器時代住居跡は発見以来、概報はされているものの本報告はされていない。ここではこれまで本住居跡に関連する文献を集成した。新聞記事も含めると13点を確認することができた（第8表）。そのうち4点を再収録する。文献は全文を掲載することを旨とするが、山崎氏報告の引用は一部省略した。さらに旧字体は新字、漢数字は西洋数字に置き換えて、読点、改行を施し、読みにくい漢字は平仮名に直し、明らかな誤植は訂正し、読者の便宜を図った。またキャプションが無いものはこちらで便宜上作成した。

第8表 勘場木石器時代住居跡関連文献一覧

No.	文 献	備 考
1	山崎義男 1954『群馬県長野原町勘場木 石器時代竪穴住居跡について』	本章第2節
2	県立長野原高校新聞部 1955「郷土史跡めぐり（一）勘場木石器時代住居跡」『長野原分校新聞』創刊号	第15図
3	塩野新一 1972『群馬県吾妻郡長野原町（群馬県史跡指定）勘場木遺跡』	本章第3節
4	長野原町 1976「勘場木遺跡」『長野原町誌』上巻	山崎概報引用
5	相川徹子 1977「浅間火山博物館と吾妻川沿岸の遺跡について」『関東の史跡と文化財』第369号 関東史跡会	
6	桜岡正信 1988「勘場木遺跡」『群馬県史』資料編1	本章第4節
7	長野原町教育委員会 1989「勘場木石器時代住居跡」『長野原町の文化財』	
8	上毛新聞記事「外からでも観察OK 長野原の勘場木住居跡保存用の新覆屋が完成」平成3年4月14日	
9	池田政志 1999「勘場木石器時代住居跡」『群馬県遺跡大辞典』上毛新聞社	
10	富田孝彦 2001「勘場木石器時代住居跡」『群馬県の史跡（原始古代編）』群馬県教育委員会	本章第5節
11	長野原町公民館大津分館 2004「石器時代の住居跡」『写真集「大津のあゆみ」』	
12	上毛新聞社・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団編 2005『群馬の遺跡・2 縄文時代』	施設紹介
13	奈良文化財研究所文化遺産部遺跡整備研究室編 2013「勘場木石器時代住居跡」『遺構露出展示に関する調査研究報告書』	

第2節 『群馬県長野原町勘場木石器時代竪穴住居跡について』

群馬県文化財専門委員

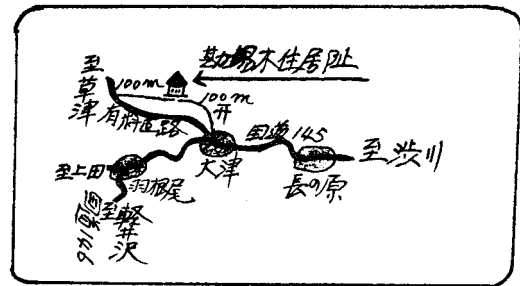
山崎義男

1 はしがき

本遺跡は昭和28年暮、吾妻郡長野原町大字大津勘場木438番地の畑地を田圃になす為に、土地所有者塩野要造氏と、その子息新一氏が開墾している際、偶然一完形土器を発見したのに興味を覚え、引継いで発掘を続けている内、偶々住居跡の西南部を発見したので、なお続行して本年（昭和29年）1月、竪穴を完全に露出せしめたのである。そこで同町教育長桜井東介氏が来橋して、県会図書室長萩原進氏にその旨報告した。萩原氏からその報告は私に伝えられたので、早速1月23日、24日両日現場に赴き、発見者塩野氏、桜井氏両家の御厚意に依り大雪の内を容易に遺蹟遺物を調査する事が出来、不完全ながらこの報告文を書くことが出来たのである。

2 所在地

県道中之条上田線は、吾妻川の左岸沿いに走る吾妻郡の幹線であるが、長野原町大津にて二又に分岐し、本線は鹿沢方面に向い、右する分線は約 10km で草津温泉に達するが、この道路に沿って右折するとすぐの部落が字勘場木である。本遺跡は県道から北方



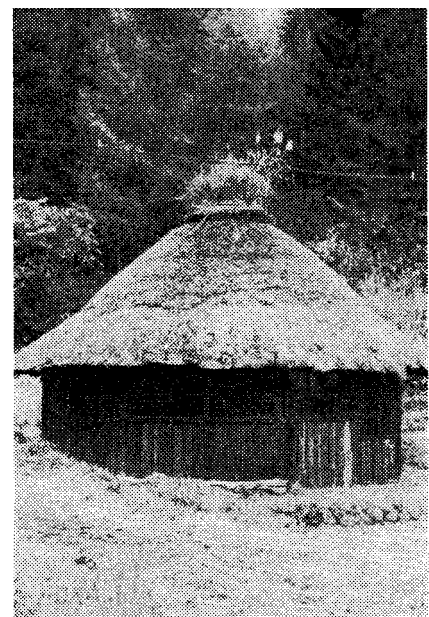
第 43 図 位置図

約 300 m ばかり右に入った畑地にあり、南西部は限界が開けていて、東南部に小溪俗称大津用水が流下し（現在の水路は人口に依ったものだが、全然新らしい水路でない事は堅穴発掘に際しこの附近の地下から多数の川砂利が発見されている点で推測できる）東北部は山に囲まれていて、日当りのよい突出台地をなしている。標高は 750 m 程度と思考される。5 万分の地図で位置を求めるなら、小字名勘場木と記載されているヶ所の「場」という字の附近に一軒屋がある。それが塩野氏の宅で、その東部畑地に堅穴が発見されたのである。

3 住居址

住居址の西南部は、図示の通り偶然発掘に際し、周壁は取崩されて不明であるが、底面のロームの堅結状態からしてその境界は容易に判断できるのであるが、住居址の平面は平均約 4 m 50cm の近似円形をなしている。表土は約 50cm 程度の黒色土であり、それに続いて黄色粘土層となり、その層に掘り込んで住居址が出来ている。注意されるのは北から南に向って図示 A-A 断面の如く約 3 度の勾配で底面が傾斜している点と北部周壁は床面から約 40cm に近く深堀されているが、南部に向うに従いその深さを減じている点であり、これはロームの自然勾配上に底面を定めて、北部のみ深くローム層を掘り下げ、南部は勾配の変化に従い殆んど無壁となした如く築造されたものの如く、所謂片掘り型の堅穴式住居址であって、こうした例は神奈川県横浜市青ヶ台遺跡、本県では多野郡藤岡町光徳寺裏遺跡等で、如実にその類似を知るのである。

周湟は東北部のみに発見されたが、底面の高所から端を発し、南部の最低部でその巾と深さを増している事は、排水の理に従っている如く推思される。炉趾として確認出来るのは図面中央記号 14 であるが、長径約 70cm、短径約 60cm の近似矩形をなし灰および木炭を発見した。近接 13 号は長径約 50cm、短径約 40cm の楕円形をなし、これも灰を伴ったのであるが、近接して二ヶの炉の必要も考えられないし、底面及周壁の状態からして重複した堅穴住居址とも考えられないので、此の場合炉趾として断定出来難く一応疑問とした



第 44 図 住居址

い。15号は長径1m30cm、短径1m10cmの楕円形をした凹部であるが、こうした凹部はこの種堅穴住居址には往々見受けられるものの如く、強いて推測するなら所謂貯蔵所とも考えられよう。

柱穴は12ヶあり、その形状は図示表の如くである。その内記号1、2、3、7、10、12の6孔を主柱と推定すると大体等間隔であり、その各孔の規模からしても妥当性が多い。

尚出入口は底面のこう配からしても、小柱の存在からして特にその部分の構造が複雑であつたろうと想像される点より南面即ち柱孔3と7の間ではあるまいか。

4 遺物

石器

住居趾から安山岩製石棒断片長30cm、径11cmのものが出土している。その他は短冊形に類する長10cm、巾3～4cm程度の打斧が数個出土しているが、石質は主として砂岩で、又安山岩製のものも見受けられた。黒曜石破片が3、4ヶ出土しているが、それによる完形品はなかった。

土器

完形しているのは唯1ヶで高16cm、口径12cmの甕で、平底径7cm、頸と胴との境界部径8cm、器厚5mm、黒褐色を呈し口頸部は無文、胴と頸との接合する部分に2条の隆線が取巻き、肩部から以下は荒目の右撚左傾縄文が一面に附されている。小形甕でその特徴を把握出来難いが本ヶ所の土器片から推定して加曽利E2式類似と思われる。

土器片

土器片を大別して南関東地方の編年を標準とすれば、加曽利E式の新、旧2式、堀の内式の新、旧2式に区分される如く考察される。次にそれぞれ各形式の土器片について記載する。

A 加曽利E1式

甕

共通点としては口頸部が無文である。肩部から以下は全面に左傾縄文のあるものと篋描矢羽根形沈線で埋められたものと2種類ある。勝坂式類似波型隆線文が頸と胴の接合部に張り付けられたもの、又は同上形をした所謂垂飾的文様を胴部に張付けたもの、頸胴接続部に2条の隆起線を囲らし、蕨手状渦文を前同垂飾的手法で胴部に張付けた類、又勝坂式に見られる籠目式と呼ばれる手法を用いたもの、即ち粘土の細紐を土器面に張付けるかわりに半載竹管で土器面に隆起の連続を作りその上にその線と斜向して細紐を荒目に張付けたもの等で、焼成は大方よく赤褐色又は黒褐色を呈し、胎土は荒々しく器厚8cm程度、全般に隆線は未だ衰えず、勝坂式の余韻が残っている。

深 鉢

同一器と推定される破片が数片あったが、仲々復元は困難と思われた。それによれば口縁部がく字形に内曲し胴部は長円筒形を呈し、口縁部の上下隆起線間は篋描沈線にて、所々に上下隆線を結合させる環状の盛り上った把手があり、その尖端は口縁を波形に変化させている。頸部は無文で胴部は竹管文の刻目のある2条の隆線が廻って、それから端を発した渦巻の垂飾的隆線で区分され、その内部は篋描矢羽根沈線で埋められている。厚8mm、黒褐色を呈し器面は金雲母を、胎土に長石紛を含んでいる阿玉台式と勝坂式の両方に類似の点がある哉に考えられる。

B 加曾利E2式

前記小形甕が該当される。

深 鉢

口縁部上下2隆起線を所々で渦巻で区切って、その内部を篋描沈線、又は水平に近い傾斜縄文で埋めている。胴部は沈線で区分して、その内に左傾斜縄文を認められるものもある。厚8mm程度。

浅 鉢

口縁く字形に外曲し、胎土は長石紛を含み、荒々しいが、焼成甚だよく、しかも内外器面よく研磨され赤褐色を呈し口縁部内面は、丹塗りである。表面に文様はない。厚8mm。

C 堀之内1式

深 鉢

口縁部に粘土帯を囲らしその為に口唇部断面は三角形をなしている。帯表面は篋で、刻目を附している。厚5～7mm程度、黒褐色で胴部に篋描沈線で三角形渦巻状模様のあるもの、又は2条の沈線が胴部を取巻いて、それから所々に2条の沈線が垂下して区間を作り、その内を荒々しい右斜縄文で埋められたものもある。

D 堀之内2式

深 鉢

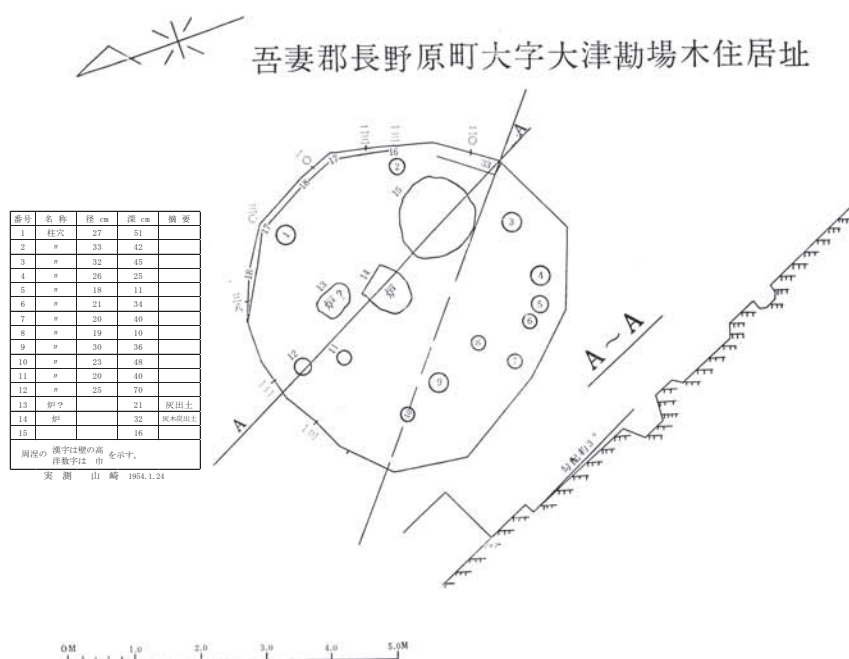
口縁所々に小隆起把手あり、その表裏面に1ヶの渦巻沈線を描き、口唇は篋で鋸歯形にきざみ目をつけている。土器把手表面渦巻文から下方に3条の沈線が垂飾的模様に描かれている。5mm程度の薄手で赤褐色を呈し焼成はよい。

5 あとがき

長野原町大字大津には、この遺跡の他、同じ文化圏に字二軒屋、字立石等があるが、総て勘場木に続いて草津街道に面した東南面の突出台地である。従ってこの種堅穴式住居趾は従来出土の例にみても群集して存在する可能性がある。

又土器による編年は4通りに分類され、厳密に云えば4文化期が重複している訳だが、出土状態から云って別に層位的相違は無いものの如く、従って出土量の比較的多

い加曾利 E1~2 式の文化圏に属する住居跡と認めて支障ないものと思う。尚同町横壁ではかつて敷石住居跡が発見された由であるが、然りとせばこれはむしろ堀之内式に属するものと考えられいずれにしろ石器時代中期末から後期初頭にかけて、吾妻川沿岸、長野原を中心として相当な集落が営なまれた事は推測される。最後に今度注目される点として、隣接長野県文化との交流地として最も重要な場所であり、この附近から県界方面は一層研究されるべきである。(完)



第 45 図 住居跡実測図

第 3 節 『群馬県吾妻郡長野原町勘場木遺跡調査（概報）』

群馬県勘場木遺跡の縄文式土器について

1.

中部山岳地帯における縄文文化に対する一般的な認識と理解は、戦前よりの尖石遺跡、戦後まで調査した井戸尻遺跡の資料に基く場合が多い。ところが長野県東信濃区において、軽井沢南石堂、小諸郷土、小諸氷、埴科幅田等の遺跡調査によって新たな遺構遺物の発見と調査がなされ、(註 1) ここに従来の見解を大いに発展させる必要が生じて来ている。本稿はこうした中であって、特に、勘場木遺跡出土の土器についてふれ、当該上信国境地方及びその周辺における縄文文化研究の一資料に供そうとするものである。

勘場木遺跡は、群馬県吾妻郡長野原町大字大津字勘場木 438 番地とその台地周辺にあって、昭和初年塩野要造氏によって注視され昭和 29 年に山崎義男氏等で発掘調査が行われ、その概要はすでに考古学年報(註 2)等によって報告されている。しか

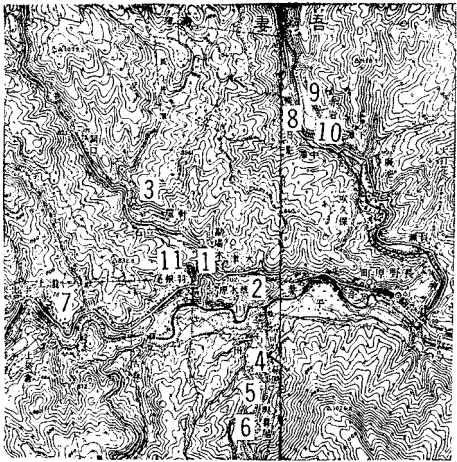
し、これ等の報告においては土器そのものについての記述は紙数等の関係から決して十分なものではなかった。従ってその詳報はすでに各方面から期待されていたものである。

※ 群馬県下では、古墳時代に至り、東国最大の古墳分布地域として栄えた。ことに縄文時代遺跡を紹介するに隣県、長野県方面の文献等も参照し、上信国境のうちことに信州側の縄文時代遺跡を付して参考資料とした。

2.

上信国境の本県界には縄文遺跡多く、佐久地方溪谷性遺跡の立地と相共通する環境にある。勘場木遺跡ではことにその性格が強く、遺跡の所在する附近は、白根山(2,164m)の南麓、白根硫黄鉱山に源をなす遅川が流入する吾妻川の南岸に位置し、標高約700mを計る。附近の遺跡は縄文遺跡ばかりでなく、吾妻川下流では弥生時代の岩櫃山、鷹ノ巣洞窟、道心穴、蝦夷穴遺跡群等は弥生式でも古式に属する墳址として著名であり、該期の土器は、浅間連峯を隔てた南佐久郡月夜平、上の原、佐久市深掘遺跡からも検出され、種々問題点が上げられている。(註3)

さて先行する弥生文化に両県相共通した土器の存する事を指摘しつつ、次の縄文文化を概観してみたい。長野原町附近の主要遺跡は表1(第9表)の如くであり、当地方では発掘調査少なく、相急な判断はさけたいが、吾妻川上流域は、河川に沿った分布状況にあり、溪谷性と称しても良い。ただ浅間山の火口より北東部一帯は大きく白紙となっているが、天明三年の大噴火による泥川が流下し、吾妻川一帯にも及んだといわれる。これが今日の六里ヶ原を形成している。また上信国境は火山活動の泥流堆積ばかりでなく、火山噴出物の浮石流の堆積もみており、火山活動と遺跡の立地の上からも話題にもなっている(註4)火山活動の姿は煙が恋歌となり古典に登載され、さらに時期が下り、浅間修験熊野修験の霊場ともなった。この事は私達の祖先は大昔から高山大岳には神霊がしまり給うという信仰を持ち、そうした山の神々は



第46図 群馬県吾妻郡長野原町大津・勘場木遺跡周辺遺跡の分布(1:20,000)

第9表 吾妻郡長野原町遺跡一覧表

番号	時期	所在	地図	地目	立地	遺品
1387	縄文	大字横壁字中村	草津	畑・水田	平地	摩石斧、石匙、石鏃、土器片(中期)
88	"	大字横壁字東平	"		平地	石器片、土器片(中期)
89	"	大字与喜屋小字下田	"		平地	石斧、土器片(前期)(晩期)
90	"	大字与喜屋小字本村	"	畑・宅地	傾斜地	土器片(前・中・後期)
91	"	大字与喜屋小字上ノ平	"	畑	"	石槍、盃、石錐、土器片(中・後期)
92	"	大字応桑小字小宿	"	畑・宅地	平地	土器片(前期)
93	"	大字大津	"	水田	平地	石斧、土器片(前・中・後期)
94	"	大字大津小字勘場木	"	水田	傾斜地	土器(加曾利E、堀之内)石器
95	"	大字立石	"	畑	平地	磨製石斧、石錐、石匙、石鏃、(中期)
96	"	大字林小字下田	"	畑	傾斜地	石匙、土器片(中・後期)
97	"	大字林小字大村	"	"	"	石鏃、石斧、土器片(中・後期)
98	"	大字川烏湯小字原畑	"		"	土器(群大史学研保管)

地方の守護神であり、鎮護の神としてあつい崇敬が捧じられていた。この様な山岳信仰の源は山における素朴な人々の生活の上に欠くことの出来ない水を恵み、また山々からむらがる雲・霧は時になって雨となり、あるいは雪となって気候をやわらげ、流れ出て大地を潤し沃野を作り、滋雨をもたらしてこそ五穀を稔らせ生活の上に豊かな恩恵をもたらした。また時には雷鳴、霖雨、暴風、洪水の脅威となって人々にせまってきた。そこで人々は礼を尽して神慮を慰め己を逃れんとしたし、感謝と祈願との信仰を深めて山が信仰の対象となり、あるいは峠路でも同様であった。上野国神名帳に正一位浅間大明神が銘記されているがそれである。またそれと別の修験、熊野修験が伝えられ、利根川支流一帯総数 359 の社の分布をみている。(註 5) ことに峠の熊野社は景行天皇 40 年 10 月熊野三社を勧請したといい、日本武尊を男神、伊邪那美命を女神の夫婦神であったといわれ、この社には大正年度故永峯光寿調査官、調査にかかわる正応元年壬辰卯月 8 日銘の鐘が伝えられ、音の聞ゆ地方に正応の鐘恋しやの伝承が生じたといわれる。(註 6)

さて、上信国界の遺跡の立地及び環境について概観し、両県地域に於ける文化様相の共通性を述べ、遺跡での古代人の生活と浅間火山が共存している事に触れつつ勘場本遺跡についてふれてゆきたい。遺跡の所在する台地からは、西南方に浅間山が遠望される。

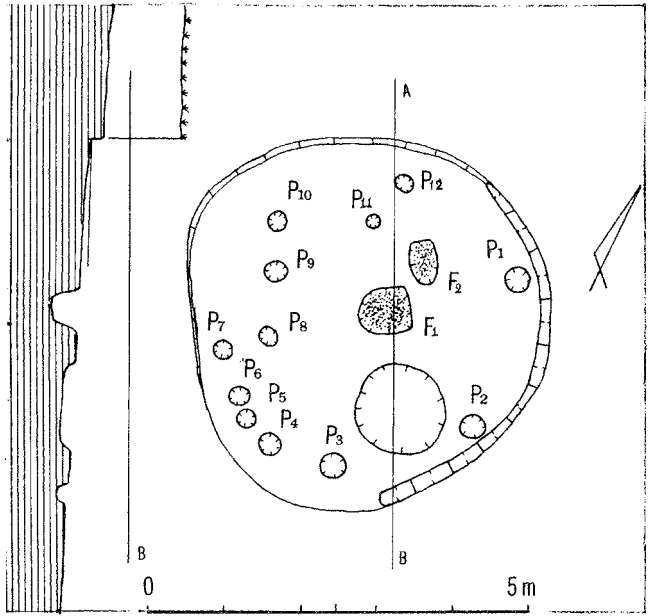
3.

勘場木遺跡の概略は、山崎義男氏「石器時代堅穴住居址について」の原稿があり、土器分類は再整理を必要とするが、遺跡の性格を知る上で全文を再録する。(註 7)

※前節で掲載しているので省略し、文章に合わせて作成した図面は掲載する。

- 1、はしがき
- 2、所在地（第 46 図）
- 3、住居趾（第 47 図）
- 4、遺物
- 石器（第 48 図）

土 器（第 49・50 図）

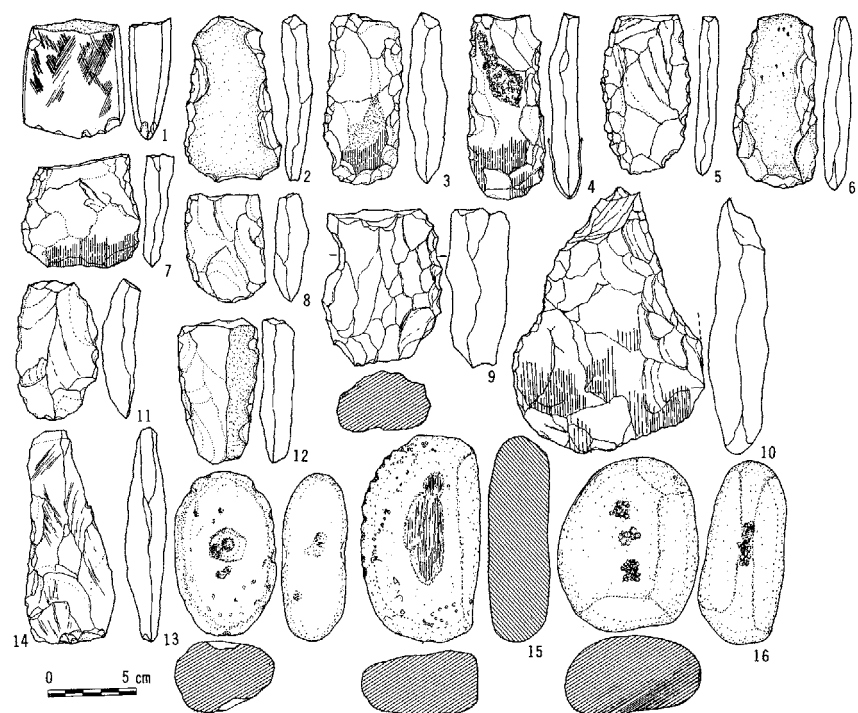


第 47 図 群馬県勘場木遺跡住居址 (1:200)

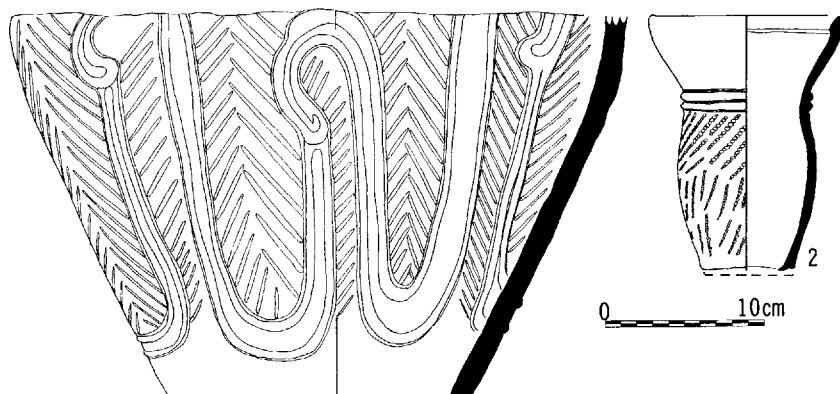
第 10 表 住居址柱穴一覧表 (cm)

番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	F1	F2
名称	柱穴	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	炉址	炉址
直径	27	33	32	26	18	21	20	19	30	23	20	25		
深さ	51	42	45	25	11	34	40	10	36	48	40	70	21	32
摘要													灰出土	灰木炭出土

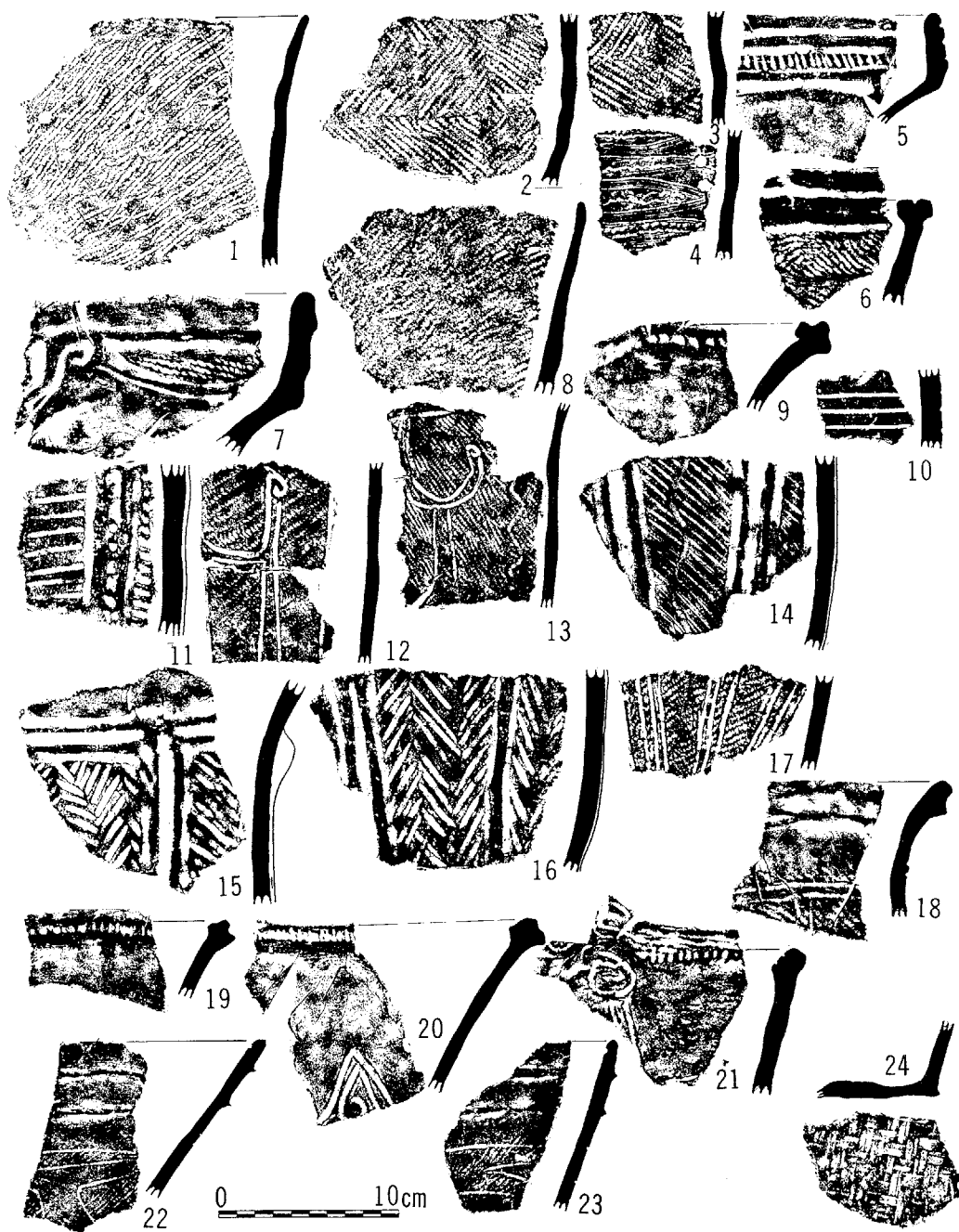
以上が山崎氏調査所見で、氏はこの翌年、つまり昭和30年5月～9月にかけて軽井沢町境新田と松井田入山の峠路の入山峠にて祭祀遺跡の調査発見にあたっている頃で、当時の成果より該期文化の諸問題点を指摘しており、その後20年程経過した現状の資料にて、遺跡を再度整理したい。



第48図 勘場木遺跡住居址出土石器(1:5)



第49図 勘場木遺跡住居址出土土器(その1)(1:5)



第 50 図 勘場木遺跡住居址出土土器（その 2）（1:4）

4.

さて、千曲川上流地域における縄文後・晩期遺跡の分布と、配石状遺構の伴出遺跡の分布状況を 集計してみると、それから本地方ではその遺跡の立地が、流域に沿っており河岸台地となっている。これ等の遺跡での既出土製品及び土偶のあり方については、桐原健氏が問題点を述べている。その後調査の行われた本地域での遺跡より、遺構状況の事実を示し、再整理をしたい。

（１）浦屋敷遺跡＜小諸市加増浦屋敷＞

昭和 28 年発掘調査が行われ、遺構は東西 9m、南北 7.3m のほぼ円形プランをなし、敷石住居址であり、二ヶ所調査されている。イ号址はかなり覚乱がみられ敷石は断続して一石の上に二石が重なり、よく旧態が示されている。範囲は 3 × 3m の広さで形状は円状なプランとなっている。東南の隅みに炉址らしい跡が残る。東南に径 32cm、深さ 30cm のピット遺構があり、与良清氏は貯蔵穴か、墳墓的なものか判明しないと述べている。遺物は敷石面から凹石、敲石、打製石斧が出土している。ロ号址はイ号址より北西地点 2.4m 離れて位置して発見された。比較的よく遺構プランは残り、経約 4.2m の円形敷石遺構で、中央部に紫褐色を呈する浮石切石 6 枚を楕円形に並べたものがあり、径 42cm を計る。炉の内底に口縁部を欠く。素製浅鉢形土器が伏せられていた。また敷石外部端には縁取って大小の石で斜めに埋めた境石らしいものが弧を描いている。敷石は鉄平石ではなく、自然石を整然と並べた配石が検出された。またこの面より支那銭数枚が出土している。両遺構とも鉄平石を敷いてその面は同レベルとなっている。遺物としては縄文中期土器片に交り注口土器片、浅鉢形土器等堀之内式に相当している。また小諸市郷土遺跡では、ロ号址遺構に形態がよく似て、一辺 2.8m のやや中心ふくらみの方形プランで、火山灰層を 25cm 掘り下げて、そこに 1.5~2cm の厚さの鉄平石を接合するよう打調して敷きつめてある。炉はほぼ中央部にあり、一辺 50cm の方形石囲炉となっている。炉の内部からは炉からは焼けた骨片が出土している。柱穴と思われピットはなかった。この敷石遺構住居址の南壁に接して 2.2 × 0.9m の長方形プランをとる墓址がある。肩部に石を立ててあり、足部にも石を置き、東側壁にも割石を積んである。敷石住居址からは縄文中期加曾利 E 式のコップ形状土器、短冊形打製石斧、縄文後期堀之内式土器片が伴出している。つまり遺構は縄文中期に構築され、住居址に使用されたものが後期に至り墳墓の跡を示している。

敷石遺構の特異あるあり方は、敷石周端に石斧（打製）が立並して出土しこれのあり方は次に記述する茂沢南石堂遺跡第 3 地点遺構と規模プラン、生活のあり方がよく類似し、浅間山と相対する位置にピットを構築しその上部に集石積した遺構が存する。さらに望月町協和字吹上からは方形石囲炉を伴い、きわめて鉄平石を微ずか配置した敷石住居址が確認されている。時期はいつでも縄文後期土器片が伴出している。郡内にはこの他石神、宮平、舟久保、芦田古町等から縄文後期の配石址が確認されそれ等は、敷石遺構的なもの、住居址と思われるものが知られている。

鹿曲川流域 協和には今日尚きわめて良質の鉄平石の産出をみている。（註 8）

（２）宮平遺跡＜御代田町大字豊昇字宮平＞

御代田町公民館より東方 4km に豊昇部落がある。この東側丘陵 50m に位置し、部落の南側を湯川が東西に走り、この遺跡の台地は標高 800m である。この緩傾斜面は、東西 200m、南北 100m 位の長方形台地であり、宮平地籍附近は、小田井から豊昇より茂沢を通過し、入山峠をへる道筋は旧道であり、最も古い古通路の名残り、東山道にあてられている。この社は合併で遷宮し、今は居住地域で用いられた敷石を高く積み上げた上に、大正 3 年大井宅蔵氏の建てた「春日神社碑」があって神社址を明らかに

にしている。

宮平遺跡は古くから地方人の話題にも上り、その出土品も大井氏が蒐集したといわれ、明治12年村誌にも「此の畑中何と申事なく、祭器又は古壺等の粹げたる出ず、亦右地より掘出し候、石器、雷槌、雷斧、神足石等所有持するもの有之」とある。本遺跡の調査は、明治37年同村佐々木朝次郎氏の発掘を始めとし、大井宅蔵氏の間歇的な発掘、また昭和5年6月15日北佐久教育会と共に軽井沢在住のアイヌ人研究医師で人類学者であったM・G・マンロー博士の発掘をへて、昭和6年八幡一郎氏の調査となった。氏は石器時代住居址なる事を認めて次に述べている。

『伍賀村の遺物蒐集家大井宅蔵氏は同村宮平の遺物の地下には層々石が並んでいるのを実見した旨語った。宮平遺跡地は湯川の左岸久能部落より一段高い丘陵縁に存し広い範囲にわたって多量の遺物が散乱している。一体に砂質の耕地で其一部を掘り下げること約50cmにして敷石面に到達した。発掘区域長さ約9m、幅約7mに亘って一面に規則正しく又不規則に大小の石が敷き並べてあった。規則正しい部分が多く全体の状況を十分に調査することが不可能であった。諸所に炭末があり遺物があった。住居にあるべき炉柱穴の如き施設には遭遇しなかったが、敷石住居址であることは、小県郡東部町の滋野寺の浦、成立に発見された遺跡と共通し、……』と記し、遺物は三群に分類され発見されている。

本遺跡の調査は不十分といえど遺構が敷石的なものであったことは理解できる。附近より採集された遺品には縄文土器片と共に耳飾・土偶等の土製品が顕著なあり方となっており、今後遺跡での学術調査による成果を待ちたい。

（3）茂沢南石堂遺跡＜軽井沢町大字茂沢字南石堂＞

宮平遺跡より湯川上流地点、約2km東方に沖積台地の平坦地がある。遺跡はこの台地上800m×300mの南北に長方形を呈する台地全地籍に所在し、前述宮平遺跡と共にその存在は古くから知られ、石堂原遺跡と記載されてきた。第1～4地点まで調査をみているが、遺跡の台地の中央部（西窪遺跡）及び南端部分は調査を見ており、遺跡の北端（南大原遺跡）からは多量の縄文後期の土器片をみている。

この遺跡からは縄文中～後期にわたる配石址、箱形石棺、敷石遺構が検出され、生活様相が変化に富んでいる。また黒色土層から縄文後期の不整円形の堅穴が発見されている。

土器片の出土量は多く、東信濃区該期の遺跡の生活史への問題点が指摘された。（註9）

第1地点・配石址は大半環状にあり、黒色土層に構築され、推定される径は18.5m、幅6.5mを計る。この下層に敷石住居址の一部が検出されている。配石群に組合わせ状石棺あるいは鉄平岩石の敷石を再使用した箱形状石組が5カ所、他に土拵状のもの等がみえ、No.1からは後期の素製浅鉢が伏せ、中央部には径約20cmの丸石が抱石状態に置かれてあった。No.2では石囲いから微量の骨粉が出土し、さらにこの附近から注口土器二個体分が出土している。注口土器は加曽利B期のものであるが、報告書に記載されていないので少しふれたい。口径9.25cm、高さ17cmを計りきわめ

て固い焼成良好のもので、色調はチョコレート色をなしている。曲線施文の該期の典型的なものである。

第2地点の敷石遺構下には口径80cm、底径40cm、深さ38cmのピットが伴い、その中には堀之内期の素製浅鉢形土器が上向きに埋めてあった。ここより西に5.5m離れた位置に、径1m、深さ0.7mのピット内に石鬼、石器がつかまれ検出されている。第3地点、第4地点は、円形敷石遺構で東西約4.5m、南北4mで、一部に欠損がみられるがほとんど鉄平石である。中央部に48×56cmの石囲い炉があり、底部に径約13cmの土器が上向きに（敷石面下約80cm下に）埋められていた。この中からは微量の骨粉が出土し、さらにこの石囲い炉には蓋があったらしく、それに相当する石がそばにあった。

以上、上信国境の縄文期の遺跡を概観し、本遺跡と類似している事をふれた。勘場木遺跡周辺は遺跡多く、再度整理して扱ってみたいと考えている。

最後に調査にあたった故山崎義男・塩野要造両氏の霊に捧げると共に関係者及び協方者の労に深く感謝の意を表したい。

尚、本文の遺物実測図は土屋長久が作成した。

塩 野 新 一

註1. 縄文中・後期遺跡調査例としては長野県を主にみると、

三上次男：上野佳也「軽井沢町茂沢南石堂遺跡」『軽井沢町文化財調査報告』昭43。

八幡一郎・岩崎卓也「郷土遺跡」『長野県埋蔵文化財調査要覧』その1<昭25～40年度>長野県教育委員会、昭46。

永峯光一「氷遺跡の調査とその研究」『石器時代』第9号、昭44。

金子浩昌、米山一政・森島稔「埴科郡戸倉町幅田遺跡調査報告」『長野県考古学会誌』第2号、

関孝一・土屋長久也「東部町桜井戸遺跡」『信越線滋野・大屋間複線化工事内埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』長野県教育委員会。昭46。

これ等の調査からして、千曲川上流地域は、縄文中期終末から後・晩期遺跡の立地は諸河川の河岸台地にあり溪谷性遺跡のあり方を示し、ことに佐久地方では敷石遺構及び配石址が顕著で、このうち、茂沢南石堂、桜井戸では、縄文中期に構築された敷石住居が、後期に再度その地が墳墓址として営なまれている事が指摘され、土製品、土偶等の多いのも本地方の特質となっている。

註2 山崎義男「群馬県長野原町勘場木石器時代堅穴住居址について」第91号（謄写）

池田秀夫「山崎コレクション目録」群馬県立博物館研究報告第5・6集昭45

註3 藤沢平治「南佐久郡白田町月夜平の弥生式土器」『長野県考古学会誌』第12号

岩櫃式土器を検出する。遺跡としては、上信国境に近い菅平石小屋洞穴、唐沢岩陰、鳥羽山洞穴等からあり、上州的な樽式要素の土器では、深堀遺跡から検出されている。上の原遺跡の土器は墳墓址的な性格とされ、時期の下る佐久市蟻畑遺跡でもやや類似をなしている。弥生後期でも樽式土器と同様なものが佐久市一本柳遺跡から検出されている。

註4 文化財審議委員会「天明三年浅間山大焼記録集」御代田町教育委員会、昭44

土屋長久「浅間山浮石流下の遺物」若木考古第 84 号、昭 42。

浅間山北側は泥流が流れ、鬼押出しの六里ヶ原では溶岩樹型群となり、同山東南側では、浅間山噴出物の浮石で被われ、入山峠、芝沢、水沼、上久保遺跡等、遺構の上部が厚い浮石流が堆積し、浅間山第一浮石流（P・F・I）、同第二浮石流（P・F・II）とされ、地質方面での追求はあり、この浮石流の堆積と噴火には、入山峠祭祀遺跡の調査で、千葉大学神尾明正先生の調査があり、結果が待たれる。

群馬県遺跡台帳作成委員会「群馬県の遺跡」昭 38、110-120 頁。

註 5 井田安雄「群馬県における熊野神社の分布」『群大史学』第 9 号 1～6 頁。

群馬県教育委員会「松井田町の民俗 - 坂本・入山地区 - 」昭 42。

浅間修験については小諸藩国学者、山田弁道の「大浅間神社の遺跡を搜索る議」を著している（小諸高等学校編『浅間山研究』全所収）。今日の考古地理学的見解にたち修験道遺跡を追求しているが遺品の記載はない。

註 6 永峯光寿「関東地方の梵鐘の研究」『国史学会』大正 5。

註 7 註 2 に同じ。群馬県歴史研究会編「群馬の歴史」昭 45。

註 8 長野県埋蔵文化財調査要覧（その 1）、昭 46。

註 9 三上次男、上野佳也「軽井沢茂沢南石堂遺跡」『軽井沢町文化財調査報告』昭 43。

第 4 節『群馬県史』 資料編 1 原始古代 旧石器 縄文

64 勘場木遺跡 長野原町大津字勘場木

立地 吾妻川に沿って走る国道 145 号線は、長野原町市街の西 2 km ほどの大津で上田方向と草津方向に分岐する。本遺跡はこの分岐点から草津方向へ 200 m ほど入った北側の、南傾する小台地上に位置している（第 51 図）。この台地は、本白根山から連なる丘陵末端部の浅い谷状部分にせり出しており、標高は 620 m 前後である。また遺跡の西側に吾妻川支流の遅沢川が南流し、南側約 600 m には吾妻川が深い溪谷となって東流している。

概要 本遺跡の発見は、昭和 28 年に土地所有者が畑地を田圃に造成中に 1 個の完形土器を発見したことに端を発し、続いて住居の一部を検出し、翌 29 年 1 月には 1 軒を完全に露呈させるに至った。このことは群馬県文化財専門委員であった山崎義男に伝えられ、同年 1 月 23・24 日の両日にわたって遺構・遺物の調査が行われた。この時の調査報告は山崎義男によってまとめられている（本章第 2 節）。

なお、検出された住居は昭和 30 年 1 月に県指定史跡となり、住居保存のための小屋が建てられている。

また、住居出土遺物中に平安時代後期の土師器が混じっていたことから、周辺に当該期の遺構の存在が予想



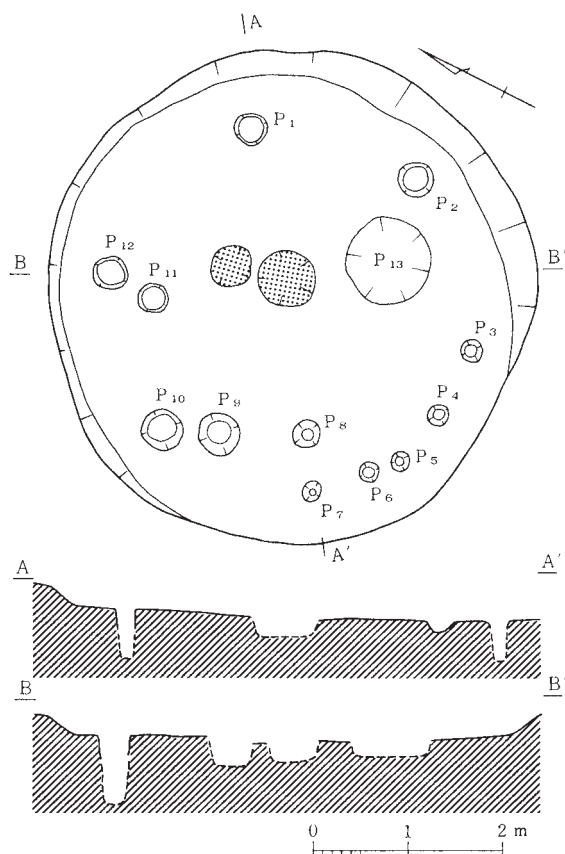
第 51 図 位置図

される。

遺構 検出した遺構は住居 1 軒だけである。住居の現状は長年の風化および床面が水田面下であることからの水の流入によって柱穴などの埋没や壁の崩壊が激しく、かろうじて 12 か所の柱穴、炉 2 か所、土壇 1 基の位置が分かる程度である。したがって、ここに掲載した住居実測図は、現地で実測したものに山崎の実測図のデータを加えて修正したものである（第 52 図）。

住居調査に関しては、以下山崎の報文の一部を引用する。

「住居址の西南部は、図示の通り偶然発掘に際し、周壁は取崩され不明であるが、底面のロームの堅結状態からして、その境界は容易に判断できるのであるが住居址の平面は平均約 4 m 50cm の近似円形をなしている。表土は約 50cm 程度の黒色土であり、それに続いて黄色粘土層となり、その層に掘り込んで住居址が出来ている。注意されるのは北から南に向かって図示 A - A' 断面の如く約 3 度勾配で底面が傾斜している点と、北側周壁は床面から約 40cm に近く深掘されているが、南部に向かうに従いその深さを減じている点であり、これはロームの自然勾配上に底面を定めて、北部のみ深くローム層を掘り下げ、南部は勾配の変化に従い殆ど皆無となした如く構築されたものの如く、所謂片掘り型の竪穴式住居址であって 一中略一 周湟は東北部のみに発見されたが底面の高所から端を発し、南部の最底部でその中と深さを増している事は、排水の理に従っている如く推思される。炉址として確認出来るのは図面中央記号 14 であるが、長径約 70cm 短径約 60cm の近似矩形をなし、灰及木炭を発見した。近接 13 号は長径約 50cm、短径 40cm の楕円形をなし、これにも灰を伴ったのであるが、近接して 2 ヶの炉が必要も考えられないし、底面及周壁の状態からして、重複した竪穴式住居址とも考えられないので、此の場合炉址として判断出来難く一応疑問としたい。15 号は長径 1 m 30cm、短径 1 m 10 cm の楕円形をした凹部であるが、 一中略一 所謂貯旧所とも考えられよう。柱穴は 12 ヶあり、 一中略一 その内記号 1、2、3、7、10、12 の 6 孔を主柱と推定すると大体等間隔であり、その各孔の規模からしても妥当性が多い。尚出入口は底面の勾配からしても、小柱の存在からして特にその部分の構造が複雑であつたろうと想像される点より、南面即ち柱孔 3、7 の間ではあるまいか。」（本章第 2 節）。以上のことから中央に地床炉を有する 6 本柱の円形住居であったことが分かる。柱穴の規模は（直径 cm × 深さ cm）、P1（27 × 51）、P2（33 ×

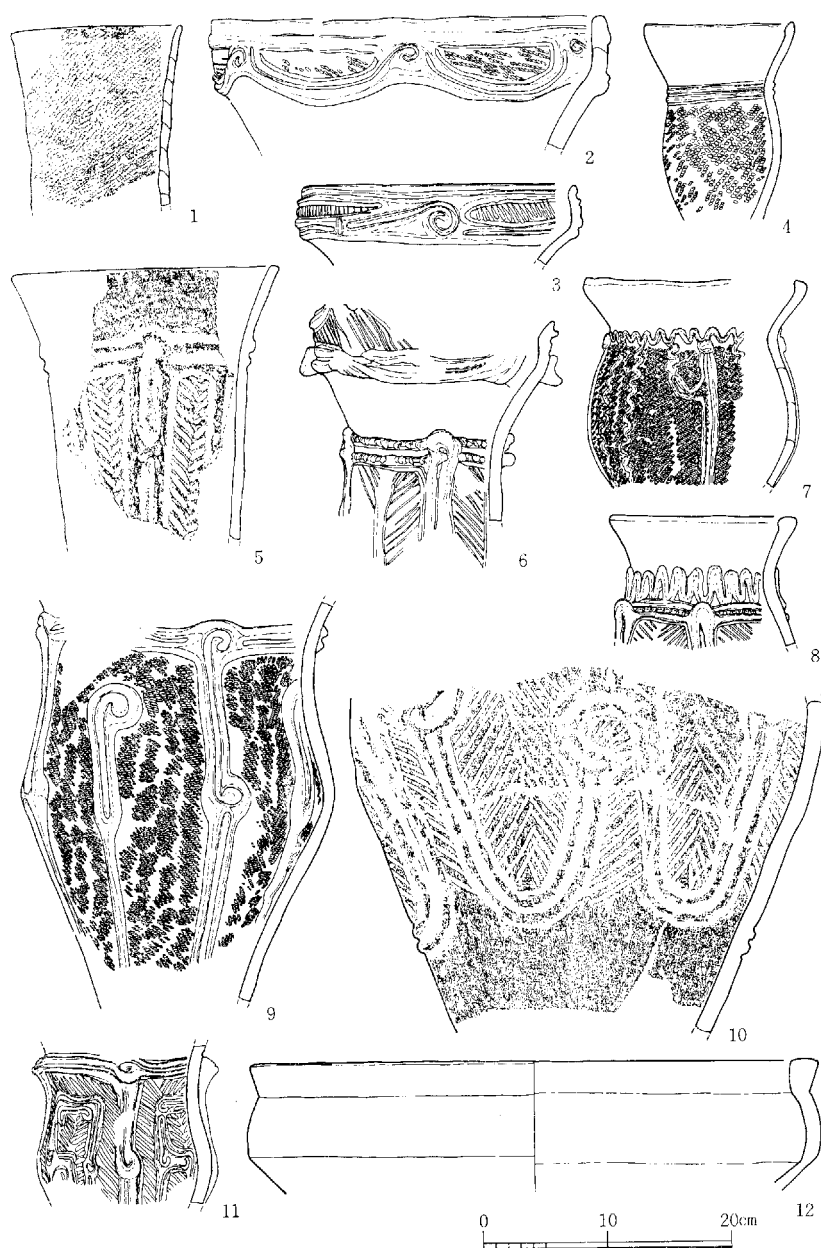


第 52 図 住居跡実測図

42)、P3 (32 × 45)、P4 (26 × 25)、P5 (18 × 11)、P6 (21 × 34)、P7 (20 × 40)、P8 (19 × 10)、P9 (30 × 36)、P10 (23 × 48)、P11 (20 × 40)、P12 (25 × 70) で、このうち支柱穴と考えられるP1～P5・P7・P10・P12の深さは、40～70cmと径に比して深くしっかりとしている。

遺物 器形・型式の分かる土器は深鉢11点、浅鉢1点で、ほかは大型の破片である。土器片だけの遺物総量は、コンテナに2箱分ほどである。石器は、打製石斧、石匙、不定形剥片石器、磨り石、敲き石のほかに、特殊遺物として石棒が1点出土している(第53～56図)。

1・13～15は前期の土器である。1は復元個体で、口径約13cm、残存高約14.5cmのやや外反気味に口縁の開く深鉢である。胎土には繊維を多量に含み、輪積み痕が認められる。胴部は全面RL多条の縦位施文である。13・14は破片で、胎土に繊維を含



第53図 勘場木遺跡の出土土器(1)



第54図 勘場木遺跡の出土土器（2） 拓影

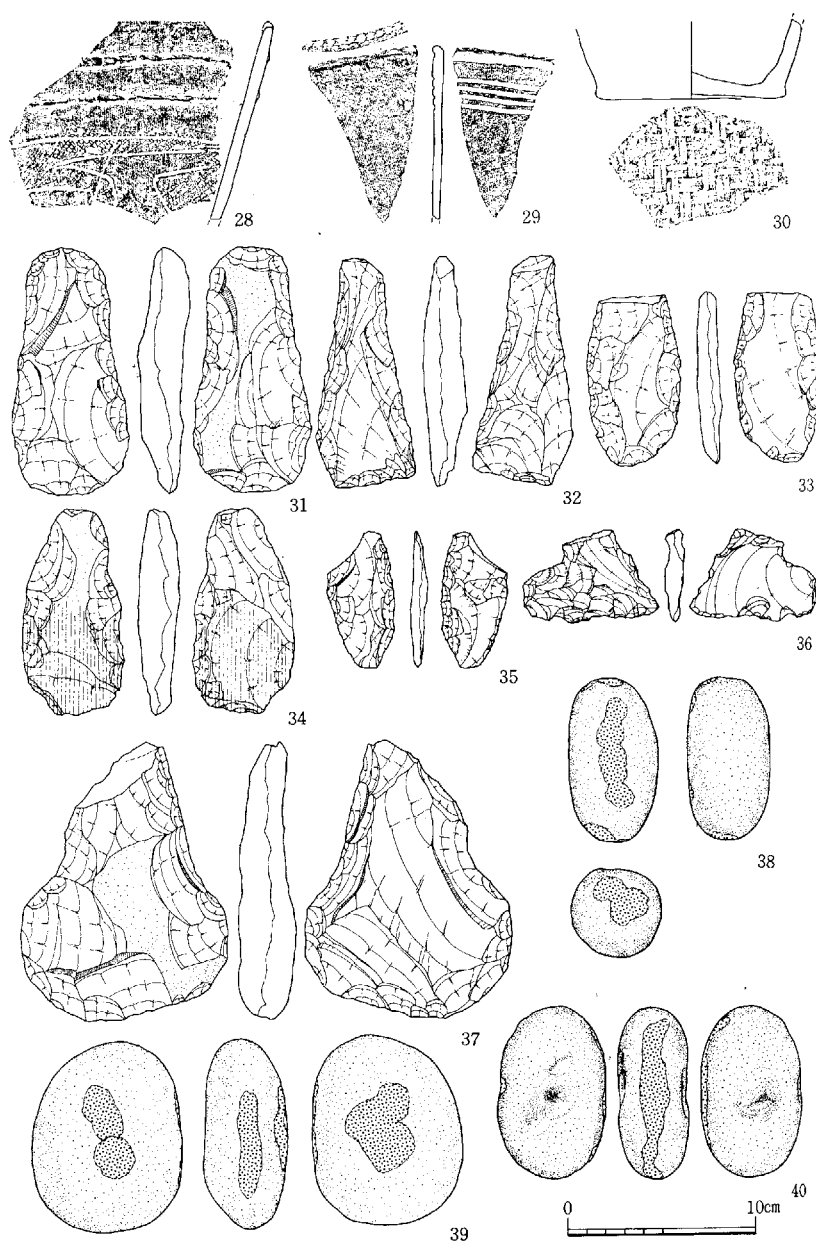
み、13はRL横位、14はRLの同一原体の施文方向を変えることで羽状縄文としている。15は胎土に繊維を含まない。文様は半截竹管による平行沈線および波状沈線に円形刺突を施している。前3者は黒浜式、後者は諸磯a式に比定される。

16は胎土に金雲母片を含み、口縁部に突起を有し、上部に押圧を施した隆帯で区画している。区画内は半截竹管を1条施しており、阿玉台式に比定される。

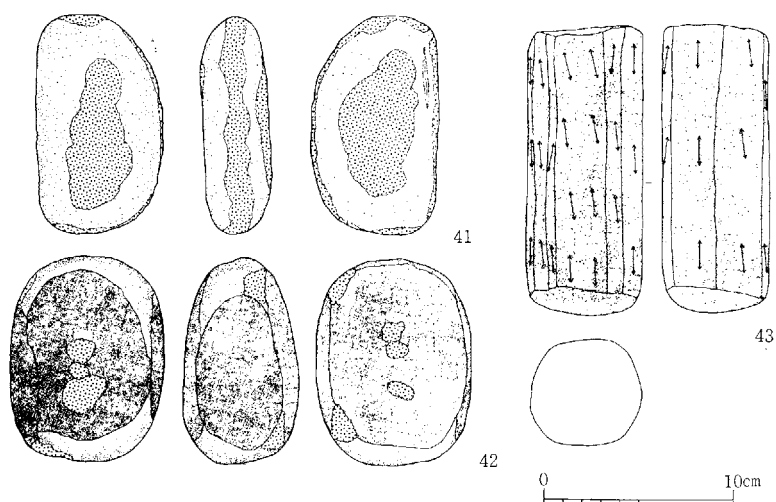
2は口径32cm、残存高約11cmで、同上位にくびれ部を有し、口縁部の直立するキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯は、口縁直下に1条の隆帯を巡らし、その下位に隆帯を6単位連弧状に貼り付けることで楕円区画文を構成している。区画内は絡条体を横位に施文後、隆帯区画に沿って沈線を施している。また、連弧状隆帯の連結部には隆帯と沈線による楕円区画文および渦巻き文で、区画内には縦位の平行沈線を施している。また頸部無文帯と胴部文様帯との区画は横位の沈線と思われる。2・3は口

縁部文様帯および頸部無文帯が明確に分離されていることから、加曽利 E 2 式後半に比定される。

4 は口径約 12cm、頸部径約 8.5cm、残存高約 16cm で、底部を欠いているものの唯一の完形品である。頸部がくの字状に屈曲し、やや内彎気味に開く口縁部を有する深鉢で、口唇部はわずかに内側に突出する。口縁部は内・外面ともに無文で、磨きが施されている。頸部には 2 条の隆帯を横位に貼り付け、口縁部と胴部を明瞭に区画している。胴部は RL の縦位施文である。また、外面の口縁部および胴部中位の一部に二次焼成によると思われる剥落が認められる。5 は口径約 21.5cm、残存高約 22cm の深鉢である。口縁部は無文で外反し、口唇部は平坦である。頸部には 2 条の隆帯を横位に巡らし、隆帯上から下方に隆帯を垂下して胴部を縦区画し、区画内には平行沈線で綾杉文を施している。6 は頸部径約 13cm、残存高約 21cm で、頸部に無文帯を有し、口



第 55 図 勘場木遺跡の出土石器 (1)



第56図 勘場木遺跡の出土石器（2）

縁部に突起をもつ深鉢である。口縁部文様帯は隆帯区画で、区画内には斜位の平行沈線を施している。また、頸部を区画する隆帯上と口縁突起との間には橋状に隆帯が施されていたものと思われる。胴部文様帯は、頸部に貼り付けられた上部に押圧を有する2条の隆帯から、四単位に隆帯を垂下して縦区画し、区画内に斜位の平行沈線を施文する。7は口径約18cm、頸部径約13.5cm、残存高約16.5cmで、頸部がくの字状に屈曲し、口縁部はわずかに内彎気味に開き、胴部の張る深鉢である。口縁部は無文で、口唇部はわずかに内側に突出している。胴部は全面にRL縦位の施文後、頸部に波状に隆帯を巡らし、連結して四単位に2条の隆帯を垂下して縦区画後、区画内に縦位に波状の隆帯を垂下している。8は口径約15cm、頸部径約12cm、残存高約10.5cmで、頸部がくの字に屈曲する深鉢である。口縁部は無文で外反し、口唇部は内側に突出している。頸部には波状の隆帯を巡らす。この下に2条の隆帯を巡らし、その間に円形の刺突を施している。この隆帯上から2条の隆帯を四単位垂下して胴部を縦区画し、区画内には平行沈線で綾杉文を施している。9は頸部径約22cm、胴部最大径約25cm、残存高約32cmの胴部がくの字状に屈曲する深鉢で、口縁部および底部を欠いている。胴部はLR縦位の施文後、頸部に2条の隆帯を巡らし、そこから2条の隆帯を四単位垂下して縦区画している。2条の隆帯の上端および中位には小渦巻きを配している。また、区画内にも上端に渦巻きを有する隆帯を貼り付けている。10は胴部最大径約38cm、残存高約26cmの大型深鉢で、胴部上半および底部を欠いている。文様は、2条の隆帯を逆アーチ状に連結して胴部を区画し、連結部には渦巻きを配している。区画内には平行沈線による綾杉文を施している。11は頸部径約12cm、残存高約13cmの深鉢で、口縁部および胴部下半を欠いている。頸部には2条の隆帯を巡らし、四単位に突起状小渦巻きを配し、渦巻き部から下方に隆帯を垂下して胴部を四単位に縦区画している。区画内には隆帯と沈線でさらに区画文を施文後、綾杉文を施している。以上の8個体は、口縁部のあり方および胴部文様から曾利Ⅱ式に比定されるものである。

17・20は加曾利E2式、21～27は曾利Ⅱ式にそれぞれ比定されよう。12は底部

を欠いた浅鉢で、口径約 45cm、残存高約 11cm である。器面は全面に磨きが施されている。28・29 は器厚はきわめて薄く、内・外面ともに丁寧な磨きが施され、紐線文および内面の平行沈線などから堀之内Ⅱ式に比定されるものである。

石器は、31～34・37 が打製石斧でとくに 34 は刃部から中位付近まで使用痕が認められた。35 は薄い剥片石器であり、36 は横型の石匙と思われる。38～42 は磨り石と敲击石で、40 には一方に 3 個、他方に 1 個の凹みがある。また 42 は部分的に敲击痕が認められるほか、両面に面取りされた磨り面があって光沢がある。43 は石棒で、径約 12cm、長さ約 30cm で、上端を欠いている。周囲を面取りして研磨調整が行われているほか、基部には敲击調整が加えられ、凹みが 1 個認められた。

以上の出土遺物で、10 が炉付近から出土している以外、位置を特定することはできないが、1 軒の住居埋没土中からの出土であることは確実と思われる。

所見 1 出土遺物の大半は曾利式系の土器であり、加曾利式系の土器は客体として入っているにすぎず、互いにほぼ純粋なかたちで存在している。これは本遺跡が長野県にごく近く位置しているため、群馬県の中央部のあり方とは逆転した様相を呈しているものと考えられる。時期は、中期後半・加曾利 E 2 式期後半段階に位置付けられる。

第 5 節 「勘場木石器時代住居跡（県）」『群馬県の史跡』

指 定 年 月 日：昭和 30 年 1 月 14 日

現 在 地：群馬県吾妻郡長野原町大字大津字勘場木 438

指 定 面 積：43.0m²

整 備 状 況：上屋改修、案内板設置

出土品保管先：土地所有者宅

交 通：J R 長野原草津口駅から車で 6 分

吾妻川の支流で白根山に源をなす遅沢川の左岸段丘上に立地する。

昭和 28 年暮れに土地所有者が畑地を田圃に造成中に完形土器 1 点を偶然発見したことに端を発し、翌 29 年 1 月までには竪穴式住居 1 軒を完掘するに至った。これを聞き、同年 1 月 23・24 日にわたって群馬県文化財専門委員であった山崎義男氏により、遺構・遺物の調査が行われた。

検出した竪穴式住居跡は直径 4.5 m のほぼ円形を呈し、北東から南西に向かう傾斜地を北東壁で 40cm 程掘り込んで床面を造っている。壁周溝は「東北部のみで発見された」と報告されているが後の精査でほぼ全周していることが明らかとなっている。炉跡はほぼ中央に位置し、長軸約 70cm、短軸約 60cm の楕円形を呈している。柱穴は P1～P12 まで確認されているが P1～P3・P7・P10・P12 の 6 本と考えられる。

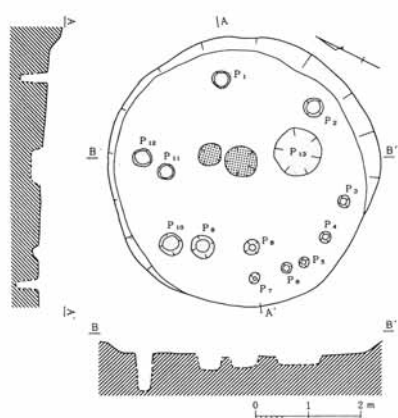


第 57 図 位置図

遺物は復元土器 12 点のほか土器片がコンテナ 2 箱分、石器は打製石斧・石匙・剥片石器・磨石・敲石・石棒などが出土している。これら遺物から住居の時期は縄文時代中期後半の加曽利 E 2 式新段階と考えられる。

本地域は長野県・新潟県と近接して位置し、土器様式もそれを反映している。加曽利 E 式系土器は客体的で、唐草文系（越後系）土器が主体を占めるという本県平野部とは逆転した様相を呈しており注目される。

（富田 孝彦）



第 58 図 住居跡実測図・外観